風柳祐生子

茶聖 山上宗二

天下さまにも勝手し候

茶聖 山上宗二

天下さまにも勝手し候

風柳祐生子

三一書房

風柳祐生子（かざやなぎ・ゆきこ）

東京生まれ。
教育ジャーナリスト、作家。
専門・芸術。テーマ・闘う人。趣味・武術格闘技。
著作
『リングス』（青弓社），『つよいのなんの！格闘技文化人類学』（青弓社），
『水辺草から見た日本史』（治水社）等。

茶聖・山上宗二

1993年4月15日　第1版第1刷発行　Printed in Japan

著　者　風柳祐生子
©1993年
発行者　畠山　滋
印刷所　株式会社シナノ
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社　三一書房
東京都文京区本郷2-11-3
電話 03 (3812) 3131 ～ 5 番
振替　東京 9－84160番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

前章
其の一　信長の気に入り……八
其の二　勝ちと負けの選択……五一
其の三　さらば恩師……七四
後章
其の四　聖典……一〇五
其の五　関東の恩人……一三三
其の六　迫りくる覇権……一五七
其の七　開戦……一七九
其の八　湿原の姫君……二〇一
其の九　関白さま面前……二四一
あとがき……二五七

装幀　加藤俊二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

茶聖・山上宗二

―天下さまにも勝手し候―

前章

「心強く、大胆な茶人―かの山の上の宗二、さつまやとも云ひし、堺にての上手にて、物をも知り、人におさるる事なき人也。―小田原御陣の時、秀吉公にさへ、御耳にあたる事申して、其の罪に、――」　『長闇堂記』（一六四〇年、久保権太輔利世（としよ）著）より

山上宗二（やまのうえそうじ）（一五四四～一五九〇）。千利休から極意を皆伝された筆頭弟子を勤めていた男。

山上宗二の遺業がなかったら、千利休の名も現代にこれほどまでの知名度を持たなかったことだろう。それほどの人物なのだが、利休の高弟七人衆である利休七哲に、山上宗二の名は入っていない。利休の死後にその様式を継承して活躍したわけではないからだ。それはなぜか。

冒頭文中の「小田原御陣の時」とは、豊臣秀吉の切腹命令による千利休の死に先んじること一年、一五九〇年（天正十八）のことである。

其の一　信長の気に入り

唐突だ。堺の町の人びとからすれば唐突としか受けとりようがない出来事だった。山上宗二がときの最高権力者羽柴秀吉と衝突して、深まる秋のなか、街を出ていってしまったのだ。

自治権を持った自由商業都市、最先端をいく芸術の都、堺。山上宗二と言えばその街の面目を、近い将来ひき継ぐ男として期待を一身に集めていた街の宝だ。身分町人、豪商薩摩屋の主人で天下に隠れなき茶人、次期領袖（リーダー）に決まっていた男。それがいなくなった。街はどうなるのか。

千宗易、津田宗及（そうぎゅう）、今井宗久の長老組が天下三宗匠として健在だから、堺の堺たる自治権がきょうどうなることはないにしても、明日はどうか。

宗二出奔の直接の理由は、秀吉が大坂城で開催した宝物茶器の展示会「道具揃え」の席上で、宗二が秀吉に耳障りなことを言って、それで「追放じゃ！」となった、とされていた。

考えられる話ではある。秀吉と宗二とでは趣味が合いそうにない。針売りから身を起こした叩き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

上げの戦国武将の秀吉。生まれも育ちも貴族町人の宗二。秀吉が赤茶碗に濃茶の緑の華やぐのを喜べば、宗二は黒茶碗に薄茶のたゆとう様子のほうが上だと言うだろう。

もちろん、話はそんな個人的なことでは済まない。噂がいろいろとある。山上宗二が長老のひとりの今井宗久の意を受けて、堺の反秀吉派を結集し、徳川家康とつながるために、秀吉との仲を自ら故意に割って秀吉から離れたというのだ。

この噂への噂もある。秀吉政権がこの噂の出どころだという噂だ。山上宗二のもとに堺の反秀吉派と徳川家康ら反秀吉大名を集め、謀叛と看做して一気に叩き潰すためだ。

どちらであれ、山上宗二の身は安全ではない。宗二は他の戦国大名に武器、兵糧ら軍需物資を調達し、支援する力を持った堺の大物だ。

堺。天下の財界であり、その財力で有力武将を天下人の座に押しあげ、自らも繁栄してきた覇王づくりをする街。長老たちを除けばその街の第一の人物が山上宗二だ。秀吉のそばを離れれば味方でなければ敵の論理をあてはめられて少しもおかしくない。

山上宗二の真意はいったいどこにあるのか。千宗易ともども羽柴秀吉ともうまくやっていたのではなかったのか。

織田信長から羽柴秀吉への政権移行のこの時期、堺の街もなにかとゴタゴタしている。それらを全部まとめて背負って山上宗二が出ていった、という側面もいずれにしろ、ある。そう思うと宗二の門弟や支持者たちは憤りと切なさにかられる。天正十一年、街をまっ二つに割っての秀吉対家康の合戦が本当に起こるかも知れず、街のあちこちに不安の影が落ちていた。

当の本人は、どこにいるのか。山上宗二は加賀にいた。北陸の大身（たいしん）、前田利家のところだ。

＊

前日までの雪が日にキラキラと輝いている。落葉樹の枝に降った雪がところどころ落ちずにそのまま固まって、氷玉（こおりだま）になり、これも日を受けて光っている。浄土には瓊枝（けいし）と呼ばれる宝木が群生していて、その木々には光り輝く玉の実がなるというが、それはこの光景に似ているかも知れない。

一子、道七がまだ幼いころ、瓊枝のことを語って聞かせたことがある。

と、山上宗二は北陸の風景を見ていた。

薄い灰紫の袷巻きをサッと巻いた袴姿で、はるかに続く雪道の途中に立っている。六尺を越す逞しい偉丈夫だ。背骨（はいこつ）あくまでも真っ直ぐな美しい立ち姿には近づきがたいほどの風格がある。短めの総髪を後方に流し、力強く端正な顔だちの、奥二重のくっきりと切れ長の目は超俗主義（ストイック）に鋭い。これが織田信長の気に入りだった男、堺の生んだ最高傑作、あるいはよってたかって創られた最高傑作、生きた芸術、そして秀吉にきらわれている男、山上宗二だ。

鎖は断ち切った。自分はもはや誰の鎖つきの犬ではない。誰に創られたものでもない。采は投げられた。自分は自分の心を自分の師とする。もう堺を出てきている。他に道はない。

雪景色が美しい。鎖のついていない身で、天と地のあいだにたったひとりで立ってこそ、わかるこの世の美しさ、愛（いと）おしさがある。山上宗二はそれをかみしめていた。

やがて宗二は金沢の街と反対方向に歩き出した。

向こうから、街へ戻るふたり連れの武士がやってきた。武士は宗二に近くなると止（と）まって礼をし

た。宗二は歩き足のまま軽く礼をしてすれ違った。
少しして、若いほうの武士が連れに言った。
「兄上、あの方はどなたです」
「なんだ知らぬのか。山上宗二さまだ」
「ああ！　羽柴秀吉公になにやら口わるをしてのけたという」
どちらからともなく立ちどまってふたりはふり返った。
「ご立派なお方ですな。やいのやいのと口わるをするようなお方には見えませぬ」
「口わるはやいのやいのとするものとは限らぬわ。あのお方がお目をギラリと光らせるとな、それはもう大変なものぞ」
「ではそれで、秀吉公を驚ろかしたのでしょうか」
「ハハハッ」
と、兄は愉快そうに笑った。
このふたりは前田利家の家臣で、彼らには、本当なら秀吉より自分たちの殿さまのほうが上だという意識がある。その秀吉に〝なにやら口わる〟をして出てきたという山上宗二に、このふたりも加賀の国も好意的だった。
いまや天下第一の実力者である羽柴秀吉の、不興を買った人間をかばう行為はおいそれとできることではないが、前田利家にはそれができた。利家はもとは織田信長の家臣で、あとから信長に仕えた木下藤吉郎の先輩だ。信長の死後はその重臣だった柴田勝家に仕えるが、その勝家と、木下藤

吉郎改め羽柴秀吉が賤ケ岳で合戦するとなったとき、柴田家を捨てて秀吉に味方し、以後、秀吉の客分的配下になっている。加賀百万石を構える大大名でもあり、前田利家なら宗二を冬の寒さからかばっても、秀吉からどうだこうだと言われない。言わせない。金沢は文化程度も高い。利家も茶道芸術が好きだ。宗二と秀吉のあいだになにかあったと知ると、すぐに宗二に手をさしのべることがこの時点ではできた。

「どこへお行きになるのでしょうか。供も連れずに」

「うん」

ふたりはしばらく宗二を見送っていた。遠くの雪山にひとり入って行ってしまうがごとき、俗を厳しく拒否している宗二の後ろ姿だった。

*

なにも、雪の深山に入ろうというのではない。だいぶかかったが目指す寺についた。本招寺。ここだ。

そこは地所ばかり広い荒れ寺だった。建物はどれも崩れ落ちんばかりに古い。それらの内部から黒く汚れた顔がいくつも現れて宗二をうかがっている。

この寺は難民に開放されている。食べ物をくれるというので他国からも人が吹き寄せられるようにやってくる。合戦で住むところを失った者や、逃亡兵や、世間からうち捨てられた者や。戦国の現実がそこにあった。応仁の乱からうち続く合戦で、この国はいまやすっかり疲弊しているのだった。宗二はそれを見ながら本堂へ向かった。

若い僧が、宗二の姿を見つけた。
「わあっ、お茶頭さま！」
僧は宗二の前まですっ飛んでくると雪上にそそっかしくひれ伏した。
「実照どの」
と、宗二が低い抑えの利いた声で返事をした。
「ほ、本当にお運び下されたのですね」
顔を上げた実照は、その童顔を感激でいっぱいにした。
「そのうちにうかがうと申した」
「はい。真にお偉いお方のお言葉はお言葉どおり。わあ、ようお運び下されました！」
若い住職代理は再びそそっかしく頭を下げた。
二十歳に満たない身で、実照はこの荒れ寺の管理運営を一手にひき受けている。一室で、茶を点ててはここの人々に献じている。寺で出す食物を、人々が人間の食事とは思えない様子で貪り食らうのを見て、なんとかしようと始めたのだ。
初めは誰もこなかった。だいぶたってからひとり、ふたりとやってきて、他の者も室内に入って見ているようになった。
実照は誰をも招客として丁寧に扱った。あてこすりのように受けとる者もいたが、子どものころから奉仕活動をしている実照は、こういうことは持久力の勝負だと知っている。そそっかしいところのある性格にも関わらず、実照はがんばった。

茶の湯が好きで、経読みを放ったらかしては茶を点て、怒られてばかりいた実照にとって、人が人扱いされて人となり、客扱いされて少しずつよい客ぶりができるようになるのを見るのはなんとも嬉しかった。

その実照を、金沢城下で一度会っただけの山上宗二がたずねてきてくれた。日の本第一の都市、堺の人で、天下人の茶頭を務めるような茶人がだ。

茶頭（茶堂）とは茶の先生にして茶席の仕切り人のことだ。山上宗二は長く織田信長の茶頭をしていた人で、羽柴秀吉の茶頭にもなり、いまはここの領主前田利家公の客になっている。その天下に名だたる茶人がきてくれた。実照が感激するのも無理はない。

山上宗二の点前は、本尊阿弥陀如来と対座して行われた。台子は使用しない。寺の茶道具を床に置いて茶を点てる。

十重二十重に人々がとり巻いて座している。もの珍しそうに宗二の所作を見ている。

実照は最前列にいる。初めは、姿がいい、所作が流れるようで無駄がない、さすがだ、と宗二を見ていただけだった。

気が付いたのは、宗二が一服を点てた茶碗を持ち、スッと実照のほうにさし出した瞬間だった。そのとき心になにかがきた。実照は礼をすると茶碗を捧げ持ち、立ちあがって本尊に供えた。

もとの位置に戻って座すと、宗二はすでに次の茶碗を前に置いていた。今度は人々に回すための茶をなみなみと点てる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c